



Title	卷七「羈旅作」考：『万葉集』部類歌巻における<羈旅>像
Author(s)	関谷, 由一
Citation	国語国文研究, 150, 1-19
Issue Date	2017-09-11
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89745
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_150_01-19.pdf



[Instructions for use](#)

卷七 「羈旅作」考

——『万葉集』部類歌卷における〈羈旅〉像——

関 谷 由 一

一 はじめに

—— 卷七・羈旅作の問題

万葉集における旅の歌の表現性を検討する中で、集中の標目や題詞に用いられる「羈旅」という語に着目し、万葉時代における旅の歌についての共通理解の輪郭を確かめようとする時、万葉集巻第七（以下、「巻七」とする）の「羈旅作」が問題となる。

歌を時代順ではなく形式や内容によって部類した巻七は、作者未詳歌巻と呼ばれることがある。だが既に指摘されているように、作者名・作歌事情等を表記しない態度は偶然の産物ではなく、編纂の論理によってそのようなあらしめた結果と見るべきであろう。渡瀬昌忠氏は、人麻呂歌集歌が巻四・八では題詞が保存されるのに対し、巻七・十では保存されない点や、巻七・十には原資料の題詞等をふまえて付されたと感じしい左注が存在する点から、巻七・十の編

纂資料は題詞を伴っていたのであり、巻七・十の歌は編者によって題詞を振り落とされたものとしている⁽¹⁾。巻七の作者名・作歌事情を記すことがないあり方は、後代の『古今和歌六帖』のような類題歌集と同様に、「詠物題による分類排列がこころみられるにあたって、新機軸による排列のためにはかえって邪魔になりかねない情報を積極的に排除した」結果と見るべきということになる。

それに対し、巻七における歌の配列を、専ら原資料のあり方に求める見解も広く支持されている。本稿で問題とする羈旅作についても、「典拠原本にあったそのままを集録した」、「行旅のたびごとに詠まれた歌を記録したものを、そのまま分類を施すことなく載せている」⁽⁴⁾といった理解が示されている。このような把握が支持されてきたのは、一つには、巻七の編纂を乱れたものとし、「其の編纂が現今からみて甚だ不統一であつて、原本の体裁のまゝ並べた形であるとしても、その中に整理さるべき余地が多く存する」⁽⁵⁾、「この巻第七は、歌一首一首の質の優劣とは別に、まともりの悪さの点で類がな

い」(『新編全集』巻頭解説)などとみなす一般的な把握にもよるのだが、それにとどまらず、羈旅作自体の問題もある。

既に指摘されているように、巻七雑歌部は、羈旅作の前に芳野作・山背作・摂津作を配置し、また羈旅作に属する歌中の地名がおおよそ畿外諸国に属することから、畿外での詠作を羈旅作歌としたと考えられる。そこには「鞆の浦」(二一八二・八三三)、同じ紀伊の地である「飽の浦」と「遠津の浜」(二一八七・八八)といったように、同一・隣接地名ごとに歌をまとめて配置する傾向がうかがえる。つまり巻七にあつて羈旅作とは、まずは「畿外での作」の意であると思われ、そこに巻七編者の「羈旅」認識の片鱗をうかがうことができそうに見える。

しかしながらその一方、同一国の作が散在していたり、地名を詠まない作が含まれていたり、畿外に属する歌中の地名に基づいて分類・配列したとのみ見た場合には、説明のつかない現象が多く見られる。さらに、もし羈旅作が「畿外作」の意味であるならば、「近江作」「紀伊作」「播磨作」などとまとめられるべきだったと考えられなくもない。このような点を一つの根拠として、前述の「そのまゝ分類を施すことなく載せている」といった判断がなされているのである。巻七羈旅作内部の配列には、こういった問題があり、羈旅作の配列が原資料のあり方を踏襲した結果に過ぎないとすると、巻七の主張する「羈旅」認識を、羈旅作の歌のあり方から受け取ることが難しいということにもなりかねない。

このような問題を踏まえた上で、本稿では、羈旅作九〇首を二つの方法・視点により考察する。一つは、羈旅作の歌と他の部・標目

の歌において詠まれる地名や物象、表現に着目し、羈旅作に属する歌が、なぜ巻七の他の部・標目ではなく、羈旅作に収められているのかを考えるものである。それにより、本来様々な場・状況で詠まれたであろう羈旅作の歌が、どのような基準で「羈旅」の歌と認定されたのかが見えてくる。羈旅作の歌のあり方は、原資料のまま塊としてここに収められたというよりも、巻七編者による「羈旅」認識の結果と見なすべきことを、ここで確認したい。

もう一つは、羈旅作九〇首の内部にどのような秩序が存在するのかという点の考察である。この点については、地名のあり方や、隣接歌同士の表現の類似・連想性などに着目した先行研究が存在する。しかしこれらは、巻七の資料性を重んじる立場から、どこまでが同一資料であるかといった観点で九〇首を切り分ける傾向があった。この点につき本稿は、九〇首全体を俯瞰することで、巻七・羈旅作が描き出す「羈旅」像についての新たな見通しを示したい。

二 巻七雑歌部における羈旅作の位置

—— 畿外にあること、海との関わり

まず、巻七における羈旅作歌が、他の部・標目の歌とどのように異なり、また羈旅作全体が巻七においてどのような位置にあるのかを検討する。

行論の都合上、巻七の内部構成を確認する。巻七は、雑歌二二八首・譬喩歌一〇八首・挽歌一三首の三部によって構成される。なお、出典が「柿本朝臣人麻呂歌集」と示されるものは、雑歌部では標目

ごとくに分散され、譬喩歌部には前半に一括されるが、本稿では便宜上、人麻呂歌集歌と作者名不記載歌とを同一の範疇の下に扱う。

雑歌部二二八首は、

- ① 詠_レ天_ク詠_レ倭琴_ニの詠物歌群_ニ・六二首（二〇六八〜二二二九）
- ② 芳野作_・山背作_・撰津作の畿内諸国での作_ニ・三一首（二一三〇〜六〇）

- ③ 羈旅作_・九〇首（一一六一〜一二五〇）

- ④ 問答_・臨_レ時_・就_レ所発_{思_レ}・寄_レ物発_{思_レ}・行_レ路_ニ・計二二首（一二五一〜七二）

- ⑤ 旋頭歌_・二四首（二二七二〜九五）

の、五つの部分によって構成される。さらにこれに、

- ⑥ 譬喩歌部_・一〇八首（二二九六〜一四〇三）

が続く。⑥は、前半に人麻呂歌集歌一五首を一括し、後半に出典未詳歌を掲げる。内部は最後の旋頭歌一首（一四〇三）を除き、全て「寄_レ衣」などの寄物形式の標目の下に配置されるため、今仮にこれらを一括して⑥とする。これに、

- ⑦ 挽歌部_・一三首（一四〇四〜一七）

が続く。⑦は末尾に「羈旅歌」を置く他は、何らの標目も記さず配置されている。

このように巻七全体を見通した時に気が付くのは、雑歌部における歌数のバランスの悪さ、特に③の歌数における突出である。渡瀬氏は、巻七雑歌部に天地人の三才構造を見た結果、天象部（詠_レ天_ク詠_レ雨）の二四首や地象部（詠_レ山_ク詠_レ鳥）の三三首に対し、人事部（思_レ故郷_ク旋頭歌）が計一七一首を占めてしまうことについて、人

事部が突出する傾向は中国の辞書・類書・詠物詩にも共通するものとして説明するが、渡瀬氏という人事部一七一首のうち、芳野作以下も含めた旅に関わる歌群（②・③）だけで一二一首にもなることは、やはり問題とするに足るだろう。これについて身崎壽氏は、「詠物部（詠物歌群）が日常生活世界の理念的な再構成の意義をなっていたのに対して、羈旅関係歌群（＝稿者注、本稿の②③のこと）は非日常生活世界のそれをうけもつものとして、詠物部に対置されている⁹⁾。」とする仮説を示す。

では、羈旅作の歌々においては、具体的にどのような要素が「非日常生活」性を担っているのだろうか。まず考えられるのが、歌に詠まれた地名の属性である。既に指摘されているように、歌中の地名が大和国や畿内諸国ではなく、畿外諸国に属していることを、「羈旅」たることの一つの重要な指標としていたことは間違いない。では、その他の部・標目ではどうなのだろうか。表1に巻七の歌中の地名を、諸説を参照しつつ、a 大和国（吉野をのぞく）、b 山背・撰津等の畿内諸国、d 畿外諸国に分類し、それぞれの地名が詠まれた歌の数（算用数字）を一覧表にした。最下段には各標目に属する歌の総歌数を示した。

(表1)

①⑦…分類標目/a/d…たわれる地名	a	b	c	d	総歌数
① 雑歌部・詠物歌群	26	4	0	1 _{*1}	62
② 雑歌部・畿内諸国での作	0	4	25	0	31
③ 雑歌部・羈旅作	2 _{**2}	0	4 _{**3}	0	90
④ 雑歌部・問答／行路	6	0	0	2	21
⑤ 雑歌部・旋頭歌	5	0	4	3	24
⑥ 譬喩歌部(旋頭歌一首を含む)	18	0	4	11	108
⑦ 挽歌部(羈旅歌一首を含む)	2	0	1	0	14

右を見た時、①③については、基本的に地名が大和(a)、大和以外の畿内(b・c)、畿外(d)のいずれかに限られることに気づく(太字ゴシック部分。ただし、令制上大和国に属する吉野(b)のみは、①②にまたがって存在する)。例外は、※1として一〇九八、※2として一一八一・一二二一、※3として一一六六・一一八五・一一八九、一一九〇番歌があるのみである。※1は紀伊の「妹山」を詠みつつも歌の主意は大和の「二上山」を讀えるもの(一一九八)であり、※2は「船出」をうたうために大和の「龍田山」が持ち出されているもの(一一八一)と、「大和より恋ひ来し」と現地を讀えるために「大和」が持ち出されているもの(一二二一)である。※3は、共に摂津の地名である「真野」(一一六六)と「名子江」(一一九〇)に問題を残すが、残り二例は後にしてきた地「三津」(一一八五)や目的地「猪名の湊」(一一八九)であり、例外として処理できるものである。以上により、原則として①は「大和での作」、②は「畿内諸国での作」、③は「畿外での作」という位置づけが見て取

れる。

それに対し、④以下は様相を異にしている。④の問答／行路では、aの六首に対し、dの二首を見る。また、⑤の旋頭歌ではa・c・dに属する例が、ほぼ同数見える。⑥の譬喩歌部ではaが最多(一八首)であるものの、cが四首、dが一首含まれ、dだけで総歌数(一〇八首)中、一〇パーセント近くを占めることになる。⑦は少ない中にcが一首含まれている。つまり、④⑦では、地名による大和・畿内・畿外の対置意識が示されておらず、地名による対置関係は、雑歌部前半(①③)においてのみ機能しているのである。

通説的把握では、雑歌部の詠物歌群(①)、芳野作から羈旅作まで(②・③)、問答から旋頭歌まで(④・⑤)の三群が、人麻呂歌集を除き「別塗資料だった形跡がいちじるしい」とされてきた。しかし、⑥に畿内諸国の地名が一首も含まれることや、歌数の少ない④や⑤にも畿外諸国の地名を詠む作が一〇パーセントほど含まれることから逆に考えると、六二首もの大歌群である①が大和での作のみで占められていることを、原資料の実態の反映と見るべきか疑わしくなる。今見る①の姿は原資料そのままではなく、巻七編纂の過程で、大和以外の畿内および畿外諸国での作を①ではなく、②・③に収めるという操作がなされた結果ではないだろうか。

この疑念は、大和以外の畿内諸国・畿外諸国の地名を詠む歌以外に、①にどのような歌が欠けているのかを確かめることでより確かなものとなる。

雑歌部前半(①)と譬喩歌部(⑥)とは、「○○を詠む」「○○に寄す」といった、歌中に詠まれた特定の物象に基づく標目を有する

という共通点を持つ。その標目には相互に共通するものも多いが、一部に相違も見られる。

渡瀬氏の整理を参照しつつ、雑歌部詠物歌群——譬喩歌部寄物歌群間で対応関係になる標目を示せば、以下のようになる（歌番号は省略）。

詠月 一八首——寄月 四首
詠雲 三首——寄雲・寄雷 各一首
詠雨 二首——寄雨 二首
詠山 七首・詠岳 一首——寄山 五首
詠河 一六首——寄川（河） 七首・寄埋木 一首
詠花 一首——寄花 七首
詠葉 二首——寄木 八首
詠草 一首——寄草 一七首・寄稻 一首
詠鳥 三首——寄鳥 一首
詠倭琴 一首——寄日本琴 一首
詠物歌群五五首と寄物歌群五六首とが対応関係にあると見られる。これらは、詠物歌群全六二首と、寄物歌群全一〇七首のうち、前者の八九パーセントと後者の五二パーセントに相当する。
詠物歌群中で残りの一一パーセントを構成する、寄物歌群に対応する標目を持たないものは、詠天一首・詠露一首・詠蘿一首・思故郷二首・詠井二首の計七首であり、どれも一〜二首ほどに過ぎず、これは、そのような譬喩歌を見出し得なかつた結果と考えて差し支えないだろう。つまり、一部の例外を除いて、雑歌部詠物歌群（①）の各標目は、基本的に譬喩歌部寄物歌群（⑥）に対応標目を持

つといえる。

これに対し、寄物歌群中で四八パーセントを占め、詠物歌群に対応標目を持たない作は、寄衣八首・寄糸一首・寄玉一六首・寄弓二首・寄獸一首・寄赤土一首・寄神二首・寄海九首・寄浦沙二首・寄藻四首・寄船五首の、計五一首である。これは少ない数とは言えない。特にこれらの中でも、「玉」「海」といった海と関わる標目（傍線部）が計三六首と、その中で約七一パーセントを占める点に注意したい。そもそも、雑歌部の詠物歌群には、「山」や「河」を詠む標目はあっても、海に関わる物象を取り上げたものは一つも存在していない。つまり、譬喩歌部寄物歌群（⑥）の各標目で、雑歌部詠物歌群（①）中に対応する標目を持たないものは、主に海と関わる物象が占めているのである。⑥の編纂においては海関係の物象語に寄せる歌を三六首も見出すことができたのに、①の編纂過程（もしくは原資料の成立過程）において、海に関わる詠物歌がたまたま一首も見出されなかつたとは考えにくい。そうではなく、海に関わる雑歌は、主に②・③に、海辺・海上の作として収められたと考えるべきではないだろうか。

そのことを具体的に確認すれば、次のようになる。玉・海・浦沙・藻・船に寄せる作は、それぞれ歌詞中に標目と対応する物象語を有している（ただし寄海は「海」「沖」「波」「浦」にわたる）。今、歌中に「玉」「海」「浦沙」「藻」「船」、および「沖」「潮」「波」「浦」といった海に関わる物象語を詠む歌を、巻七・雑歌部中に検索すると、「海」が一五首中一首、「沖」が二首中一九首、「潮」が一〇首全て、「波」が四〇首中三二首、「浦」が一五首全て、「藻」が

九首中八首、「船」は二八首中二四首、「玉」は真珠の意に限れば六首中五首が、撰津作と羈旅作に収められているのである（「浦」沙は雑歌部に用例なし）。

このことを別の側面から考える。第一節でも触れたように、羈旅作歌中に、地名の含まれない歌が多く存在（二八首）することに注意したい。この無地名の羈旅作二八首のうち、二四首は、海に関わるものなのである。すなわち二四首のうち、一九首が右の海に関わる物象語を有し、それ以外の五首（一一六七・一一八六・一一九七・一一九八・一二〇四）も「海人」「磯」等の語によって海と関わる作（海上・海辺での詠）であることが明らかなのである。

巻七編纂においては、雑歌部詠物歌群（①）は、大和国以外の地名を含む歌や、海に関わる歌を排除し、それらを撰津作（②）や羈旅作（③）に収めたのに対し、雑歌部後半（④⑤）や譬喩歌部寄物歌群（⑥）・挽歌部（⑦）ではそのような分類は行われなかったのである。また、このことから、雑歌部全体が譬喩歌部（および挽歌部）と対峙する姿を見るべきであろう。つまり、①と②・③は自己完結したのではなく、あくまで雑歌部全体の中でその役割を担っているのである。巻七が雑歌・譬喩歌・挽歌の三部で構成されている以上、個々の歌は羈旅作等である以前に、まず雑歌であることを押さえておきたい。

ここまでの検討により、巻七における羈旅作の位置については、以下の三点が認められる。

- I 〈大和〉および〈畿内〉に対する〈畿外〉に在っての作であることを地名によって示す

II 特に〈海〉に関わることを示す表現を、〈羈旅〉の重要な構成要素として示す

III IおよびIIはあくまで巻七雑歌部内部における標示であり、それは巻七の志向の一部を構成するものであって、原料の実態の単純な反映とは考えにくい

資料の実態の単純な反映とは考えにくい
IおよびIIこそが、羈旅作において「非日常生活性」を構成する要素ということになる。

では、巻七の示す〈羈旅〉とは、〈畿外〉や〈海〉に関わるものということに留まるのだろうか。また、なぜ、羈旅作が内部に、「近江作」「紀伊作」などといった標目を立てず、九〇首もの大歌群として一括されているのだろうか。

三 羈旅作全体をどのように見るべきか

以下、羈旅作九〇首の内部における秩序や、歌の内容について考察する。なお、羈旅作（一一六一～一二五〇）の配列順については、元暦校本・紀州本などの古写本によって一部改める現在の通説に従い、第四節以下で示す通し番号「1～90」によって示すこととする。

まず、既に先行研究によって、羈旅作全体に一定の配列上の構想を見る立場が示されており、その検討から始める。

遠藤宏氏は、歌中の地名の所属国に注意し、次のように取り出す。¹³
すなわち、東海道・近国として伊勢（2）・尾張（3）、東山道・近国として近江（9～12）、東山道・中国として飛騨（13）、東海道・遠国として常陸（14）・相模（16）・総（15）、北陸道・近国として若

狭(17)、山陽道・近国として播磨(18〜20)、山陽道・中国として備後(22・23)、南海道・近国として紀伊(32〜68)、西海道・遠国として筑前(70・71、85・86)、である。

遠藤氏はそこに「畿内——七道(東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海)の順、各道も近国——遠国という延喜式的図式が十分ながら見てとれる」とする。また、村瀬憲夫氏も、「種々雑多な資料を用いて編纂・配列がなされた」としながらも、全体としては「大きくは五畿七道順に則った、かなりの程度の統一体として、羈旅歌群は纏められている」とする⁽¹⁴⁾。

なるほど、大きくは右のように押さえるべきであろう。このように見ることで、東国関係の地名は全て紀伊(32〜68)の前にあり、後には西海道の地名の他、無地名の歌ばかりであることが肯われる。ただし、一部に右の原則から外れる地名の歌もあり、また無地名の歌はどのような原理・志向によって配置されているのが、問題として残る。

このことと関わり、村瀬氏は、羈旅作九〇首を、A・B・C・Dの四群に分けた上で、A群(1〜31、計三一首)については、数首ずつ隣接地名が並んでいるか、ある土地への旅の途中に位置する地名が並んでおり、これはある一連の旅毎にグループをなしてまとめられた歌の集まりであるとする。B群(32〜50、計一九首)は全て紀伊関係の歌だが、無地名歌が含まれ、原資料の段階で数首ずつのまとまりをなしていたものを元として山川・山・海に分類を施したとする。C群(51〜86、計三六首)については、同一国歌を一箇所にとまどめるという態度は見られず、歌に詠まれた物毎ないしは歌の

中心景物(内容)毎にまとめられる類聚的配列方式が見られ、また個々の歌が共通する言語(表現)・発想をもって鎖状に繋がるといふ、A群には見られない配列原理があるとする。なお、D群は「右四首柿本朝臣人麻呂之歌集出」という出典表記を持つ四首(87〜90)で、C群とは出典を異にしつつも、類聚的または鎖状の配列方式は共通しているとする。

伊藤博氏は、この村瀬氏の論を踏まえつつ、A・B群を甲、C群を乙群として押さえ、甲群に関しては、前の小群と異なる地名が現れると別の地名が現れるまで歌群は一群をなすものとし(ただし、部分的に宴席の古歌が混じっているとする)、乙群については、延喜式的国郡図式とは関係なく、共通する言葉や表現により編者によって配列されているとする。

このような把握を承けつつも三田誠司氏は、前半部(A・Bおよび甲群)に対して、後半部(Cおよび乙群)が所属国未詳の部として構えられていたのではなく、そこを含め18以下全体が「都より西の国々の歌」として、「東の国々の歌」であるそれ以前と対置的に配されていると見る。本稿も三田氏とは異なる観点から、前半部(A・B/甲)と後半部(C/乙+D)との間にある相違——原資料を異にした結果としての——を重視しない方がよいと考える。

C(乙)群において、村瀬氏が「鎖状に繋がっている」例とするものは、「貝拾ふ(51)と「恋忘れ貝(52)」、「海人(52)と「あさり(53)」、「己妻呼ぶ(53)と「妹が鳥を翔る(54)」、また「沖漕ぐ(54)と「沖ゆな離り(55)といったものである。

しかし、同様の繋がりは、A(甲)群においても見ることができ

る。例えば、「雁鳴き渡る」(1)と「湊の渚鳥……妻呼び立て」(2)、その「湊の渚」(2)という地と「潮干」(3・4)、それらと「潮満ては」(5)といった例、あるいは「海に浮き居て」「波」(24)と「ま梶漕ぎ出て」「波」(25)、その「波」(25)と次歌で詠まれる波による「濡れにし衣」(26)、また同歌の「海人娘子」(26)と次歌の「海人とか見らむ」(27)、といった例である(なお、この連鎖的関係は、紙幅の都合上、九〇首全てについて説明することはできない。次節で引用歌に傍線部で示すが、基本的に1〜50は私見により、51以下は村瀬・伊藤両氏の指摘による)。

村瀬氏や伊藤氏が羈旅作後半部の特徴と見たものは、前半を含めた羈旅作全体についていえるのではないか。羈旅作後半部には五畿七道順に違う地名(69の「高島」など)が見られるのだが、それは前半部にも認められる(6、21、29)。伊藤氏は後半部については共通する言葉や表現による配置の故とし、その判断は肯されるのだが、そうであれば、前半部についても「旅先の宴席で披露された古歌」(6〜8)についての伊藤氏『釈注』の釈文)といった例外的現象として処理するよりも、後半部同様に考えるべきではないだろうか。

B・C群や乙群といった羈旅作後半部において指摘された隣接歌、ないし近隣歌どうしの表現上の連想による連鎖的關係が、前半部のA(甲)群を含めた全体に見られるとすると、同一国の地名が分散されている理由、また無地名歌の配置理由も、より説明が容易となるのである。

例えば、播磨国の地名詠が前半部の18〜20と、後半部の69とに分かれているとされるが、前者が旅先の土地を讚美し、土地への恋を

歌うものとして前後の17や21との関連によって、ここにあることが認められるのに対し、後者は「漕ぎ泊てむ……き夜更けにけり」と自らの船泊への関心をうたうものであるため、波が立つことをうたう68や、安全な航行を願う70との関連により、この位置にあると考えることができる。

四 描かれる〈羈旅〉像

——畿外諸国を移動することとその感慨

さらに私見によれば、九〇首全体を概観した時、地名の配置と連動しながら、〈旅人の動き〉による大まかなまとまりが見られる。それは、(1)水辺(潟)での作(1〜8) ↓(2)船行の旅人を心配する作(9〜11) ↓(3)船行での作(12〜30) ↓(4)陸行(妹青山周辺)での作(31〜40) ↓(5)和歌の浦周辺を思わせる水辺での作(41〜61) ↓(6)船行での作(62〜79) ↓(7)陸行(山越え)での作(80〜90)といったあり方である。ここで九〇首は、おおむね五畿七道順に従いつつ、水辺↓船行↓陸行↓水辺↓船行↓陸行という、おおまかな一つの羈旅のイメージが描かれているように見える。そこにこそ、九〇首が「近江作」「紀伊作」などといった標目に分割されなかったことの積極的意味が認められないだろうか。以下、各グループの内部を見て行くとともに、九〇首が全体でどのような〈羈旅〉のイメージを作り上げているのかを考える。

(1)水辺(潟)での作(1〜8) は以下のようになっている。

1 家離り 旅にしあれば 秋風の 寒き夕に 雁鳴き渡る

- 2 的方の 湊の渚鳥 波立てや 妻呼び立てて 辺に近付くも (一一六一)
- 3 年魚市瀉 潮干にけらし 知多の浦に 朝漕ぐ船も 沖に寄る見ゆ (一一六二)
- 4 潮干れば 共に瀉に出で 鳴く鶴の 声遠ざかる 磯廻すらしも (一一六三)
- 5 夕なぎに あさりする鶴 潮満てば 沖波高み 己が妻呼ぶ (一一六四)
- 6 古に ありけむ人の 求めつつ 衣に摺りけむ 真野の榛原 (一一六六)
- 7 あさりと 磯に我が見し なのりそを いづれの島の海 人か刈りけむ (一一六七)
- 8 今日もかも 沖つ玉藻は 白波の 八重折るが上に 乱れてあるらむ (一一六八)
- 冒頭の1で「秋風の寒き夕」という、旅人自身が妻への思いを掻き立てられるような状況が詠まれ、これを承けて2では渚鳥による「妻呼び立てて」鳴く声が詠まれる。3では「朝漕ぐ船」が今は沖にあることを述べて時間の経過を強調するとともに、3・4にかけて干潮をうたい、次の5でこれを承けて満潮をうたう。6はこれらとやや趣を異にするが、「高市黒人の歌の世界」(3・二八〇、二八二)を心にかけている(渡瀬昌忠『全注』巻七)という説に従えば、海辺の地から立ち去る時の記念に「衣に摺る」ことをうたったと、編者に解されてここに収められたと見ることも不可能ではない。次の

7・8は、それぞれ「海岸の風物の追憶」(『全註釈』)、「旅の佳景の追憶」(『佐佐木評釈』)と解され得るもので、1〜5を承けて旅行者の心情の展開を示していることができる(なお7・8は、本来は「なのりそ」「玉藻」に旅先で出会った女性の寓意を持つ歌であったと思われるが、譬喩歌部ではなくここに収められたところからは、巻七編者は寓意を認めなかったのだろう)。

(1)は、「家」を思う作(1)を冒頭に据え、旅先の叙景(2〜5)を時間の展開を追って置き、旅立ち後のその地への愛慕を示す(6〜8)ことで、水辺(瀉)での夕暮れ夜の旅情・物想いを描くものでもある。ここで示されている「羈旅」は、家への思いから発し、旅先の景物を愛で、それに対する飽かぬ思いを抱くに至るまでのものである。

(2)船行の旅人を心配する作(9〜11)は、全て琵琶湖を舞台としている。

- 9 近江の海 湊は八十ち いづくにか 君が船泊て 草結びけむ (一一六九)
- 10 楽浪の 連庫山に 雲居れば 雨そ降るちふ 帰り来我が背 (一一七〇)
- 11 大御船 泊ててさもらふ 高島の 三尾の勝野の 渚し思ほゆ (一一七一)
- 9は「君」の船泊りを「港に停る女子」(『私注』)が思い遣るものである。これを承けて同じく男の行く手を思う10があり、行ってしまった者を思う11がある。11は単独の歌としては「近江京時代のことを回想しているか」(『全集』)とも解しうるが、羈旅作としては

「後に残った人が、貴人のおでましの先を思っているらしい。作者のお見送りした大御船が、三尾の勝野の渚にとまつて、御乗船を待っている姿を描いている」（『全註釈』）と解されてこの位置にあるのだろう。このように、(2)で描かれる〈羈旅〉は、旅先で出会った女が、旅行く者を思う姿である。

(3)船行での作(12〜30)では、(2)を承けて、船に乗る者の作が多数を占める。

- 12 いづくにか 船乗りしけむ 高島の 香取の浦ゆ 漕ぎ出れる船 (一一七二)
- 13 飛驒人の 真木流すといふ 丹生の川 言は通へど 船を通はぬ (一一七三)
- 14 あられ降り 鹿島の崎を 波高み 過ぎてや行かむ 恋しきものを (一一七四)
- 15 夏麻引く 海上瀉の 沖つ渚に 鳥はすだけど 君は音もせず (一一七六)
- 16 足柄の 箱根飛び越え 行く鶴の ともしき見れば 大和し思ほゆ (一一七五)
- 17 若狭なる 三方の海の 浜清み い行き反らひ 見れど飽かぬかも (一一七七)
- 18 印南野は 行き過ぎぬらし 天伝ふ 日笠の浦に 波立てり 見ぬへ一に云ふ、「飾磨江は 漕ぎ過ぎぬらし」(一一七八)
- 19 家にして 我は恋ひむな 印南野の 浅茅が上に 照りし月夜を (一一七九)
- 20 荒磯越す 波を恐み 淡路島 見ずや過ぎなむ ことだ近き (一一七九)

を (一一八〇)

21 朝霞 止まらずたなびく 竜田山 船出しなむ日 我恋ひむかも (一一八一)

22 海人小舟 帆かも張れると 見るまでに 軛の浦廻に 波立てり見ゆ (一一八二)

23 ま幸くて またかへり見む ますらをの 手に巻き持てる 軛の浦廻を (一一八三)

24 鳥じもの 海に浮き居て 沖つ波 騒くを聞けば あまた悲しも (一一八四)

25 朝なぎに ま梶漕ぎ出て 見つつ来し 三津の松原 波越しに見ゆ (一一八五)

26 あさりする 海人娘子らが 袖通り 濡れにし衣 干せど乾かず (一一八六)

27 網引する 海人とか見らむ 飽の浦の 清き荒磯を 見に来し我を (一一八七、「柿本朝臣人麻呂歌集」)

28 山越えて 遠津の浜の 石つつじ 我来るまでに 含みてあり待て (一一八八)

29 大き海に あらしな吹きそ しなが鳥 猪名の湊に 船泊つるまで (一一八九)

30 船泊てて かし振り立てて 慮りせむ 名子江の浜辺 過ぎかてぬかも (一一九〇)

12で船出がうたわれ、その連想により、13では船による渡河(の不可能)がうたわれる(ただし、この歌も本来は男女関係の寓意がある)。13では川向うへの思いがうたわれる訳だが、同じく対岸へ

の思いをうたうものとして14がある。また15は、『全注』が指摘するように、「直前の『鹿島の崎』の男の歌と、地理的にもかかわりがあり、『鳥はすだけど君は音もせず』の結びは、一首を隔てた『言は通へど船ぞ通はぬ』(一一七三)の結びと対応している」。同じ鳥の連想から16の「鶴」があるのかもしれないが、ここはむしろ東海道の地名の並びからこの位置にあるのであろう(16く19は陸行のようであるが、17以下は海辺から見た遠景とも解せなくはない)。17は前後との明確な関連を持たない「東から西へと歌を移行させる『つなぎ』(伊藤氏)であるが、次の18とは海辺の景(浜・印南野)を讀えるものという共通項を持つ。19は前歌と同じく印南野を賞美する。また18・19は次の20・21と同じく、景物への飽かぬ思いをうたうものでもある。なお、(3)を西下の航路と見た時に、地名からは21く25く20く18・19・22く24・26となるべきところだが、そうなっていないのは、18く21が景への名残惜しき、22・24く26が波との関わり(26は波によって袖を濡らすものとして)という一まとまりを構成し、かつ22・23が「柄の浦」の歌、26・27が「海人」の歌という関連を持つことを優先したためと思われる。

(3)ではこのようにして、他人の船をうたう12・13に始まり、14以下では自らが乗船したり下船したりしながら水辺の景をうたう。そして27・28では「荒磯」「遠津の浜」への到着がうたわれ、29・30では船泊りが詠まれる。主として言葉の上での連想関係から配されるため、16く19のような陸行と取った方が自然な作や、明らかに陸から海に出た28のような作が混じることもなる。それでも全体として、山陽道を中心とした往還の航行を想起させる配列といえる。

再び上陸後、(4)陸行(妹背山周辺)での作(31く40)が続く。

- 31 妹が門 出入の川の 瀬を速み 我が馬つまづく 家思ふら
しも (一一九二)
- 32 白たへに にはふ真土の 山川に 我が馬なづむ 家恋ふら
しも (一一九二)
- 33 背の山に 直に向かへる 妹の山 事許せやも 打橋渡す
(一一九三)
- 34 人ならば 母が愛子そ あさもよし 紀の川の辺の 妹と背
の山 (一一九四)
- 35 我妹子に 我が恋ひ行けば ともしくも 並び居るかも 妹
と背の山 (一一九四)
- 36 妹に恋ひ 我が越え行けば 背の山の 妹に恋ひずて ある
がともしき (一一九八)
- 37 妹があたり 今そ我が行く 目のみだに 我に見えこそ 言
問はずとも (一二一一)
- 38 足代過ぎて 糸鹿の山の 桜花 散らずあらなむ 帰り来る
まで (一二一二)
- 39 名草山 言にしありけり 我が恋ふる 千重の一重も 慰め
なくに (一二一三)
- 40 足代へ行く 小為手の山の 真木の葉も 久しく見ねば 蘿
生しにけり (一二一四)
- ここでは、所在未詳の「出入川」を渡るところから始まり、紀伊に入り「妹背の山」を横に見つつ(33く37)、「糸鹿の山」以下の三山を詠むに至る(38く40)陸行の旅が描かれる。

これに、(5)和歌の浦周辺を思わせる水辺での作(41〜61)が続く。

41 玉津島 よく見ていませ あをによし 奈良なる人の 待ち
問はばいかに (二二一五)

42 潮満たば いかにせむとか 海神の 神が手渡る 海人娘子
ども (二二一六)

43 玉津島 見てし良けくも 我はなし 都に行きて 恋ひまく
思へば (二二一七)

44 黒牛の海 紅にほふ ももしきの 大宮人し あさりすらし
も (二二一八)

45 若の浦に 白波立ちて 沖つ風 寒き夕は 大和し思ほゆ
(二二一九)

46 妹がため 玉を拾ふと 紀伊の国の 湯羅の岬に この日暮
らしつ (二二二〇)

47 我が船の 梶はな引きそ 大和より 恋ひ来し心 いまだ飽
かなくに (二二二二)

48 玉津島 見れども飽かず いかにして 包み持ち行かむ 見
ぬ人のため (二二二三)

49 紀伊の国の 雑賀の浦に 出で見れば 海人の灯火 波の間
ゆめゆ (二一九四)

50 麻衣 着ればなつかし 紀伊の国の 妹背の山に 麻時く我
妹 (二一九五)

51 つともがと 乞はば取らせむ 貝拾ふ 我を濡らすな 沖つ
白波 (二一九六)

右の七首は、藤原卿の作なり。未だ年月を審らかにせず。

52 手に取るが からに忘ると 海人の言ひし 恋忘れ貝 言に
しありけり (二一九七)

53 あさりすと 磯に住む鶴 明けされば 浜風寒み 己妻呼ぶ
も (二一九八)

54 藻刈り船 沖漕ぎ来らし 妹が島 形見の浦に 鶴翔る見ゆ
(二一九九)

55 我が船は 沖ゆな離り 迎へ船 片待ちがてり 浦ゆ漕ぎあ
はむ (二二〇〇)

56 大きな海の 水底とよみ 立つ波の 寄せむと思へる 磯のさ
やけさ (二二〇一)

57 荒磯ゆも まして思へや 玉の浦 離れ小島の 夢にし見ゆ
る (二二〇二)

58 磯の上に 爪木折り焚き 汝がためと 我が潜き来し 沖つ
白玉 (二二〇三)

59 浜清み 磯に我が居れば 見む人は 海人とか見らむ 釣も
せなくに (二二〇四)

60 沖つ梶 やくやくしぶを 見まく欲り 我がする里の 隠ら
く惜しも (二二〇五)

61 沖つ波 刃つ藻巻き持ち 寄せ来とも 君にまされる 玉寄
せめやも (二二〇六)

村瀬氏や伊藤氏は、作者注記のある50までを前半部(A・B/甲
群)とし、51以下を、異なる資料に基づく後半部(C/乙群)とす
るのだが、『全注』は32から61までを一括して「南海道は紀伊路の旅」

と見なしている。57に紀伊国の地名「玉の浦」があり、51以下もそれ以前と同様に浦・磯の風光を詠むものであることから、稿者も『全注』の説に基本的に従う。

(4)・(5)の諸作は、聖武朝の紀伊行幸あたりを背景として詠まれたと思しいが、(5)では風光を讚美する41〜44の次に、夕暮れを迎え大和の「妹」が思われる45・46があり、この地を去らなければならぬ思いを述べる47・48・55が配され、その後には時間の経過を反映するかのよう回想的な作(50・57・58)が置かれている。名残惜しさをうたうのは景讚美の通常の表現法であるが、このような配置によつて、一つの地に長くとどまることを許されない(羈旅)の身にある者を描き出しているといえる。

以下、ふたたび(航海)が始まる。(6)船行での作(62〜79、一部磯での作を含む)は次のようになってゐる。

- 62 粟島に 漕ぎ渡らむと 思へども 明石の門波 いまだ騒けり
63 海の底 沖漕ぐ船を 辺に寄せむ 風も吹かぬか 波立たずして
64 大葉山 霞たなびき さ夜ふけて 我が船泊てむ 泊まり知らずも
65 さ夜更けて 夜中の渦に おほほしく 呼びし船人 泊てにけむかも
66 三輪の崎 荒磯も見えず 波立ちぬ いづくゆ行かむ 避き道はなしに
67 磯に立ち 沖辺を見れば 海布刈り舟 海人漕ぎ出らし 鴨

翔る見ゆ (一一二七)

68 風早の 三穂の浦廻を 漕ぐ船の 船人騒ぐ 波立つらしも (一一二八)

69 我が船は 明石の水門に 漕ぎ泊てむ 沖辺な離り さ夜ふけにけり (一一二九)

70 ちはやぶる 金の岬を 過ぎぬとも 我は忘れじ 志賀の皇神 (一一三〇)

71 天霧らひ 日方吹くらし 水茎の 岡の水門に 波立ち渡る (一一三一)

72 大きな海の 波は恐し 然れども 神を祈りて 船出せばいかに (一一三二)

73 娘子らが 織る機の上を ま櫛もち 搔上げ栲島 波の間ゆ見ゆ (一一三三)

74 潮速み 磯廻に居れば 潜きする 海人とや見らむ 旅行く我を (一一三四)

75 波高し いかにも梶取 水鳥の 浮き寝やすべき なほや漕ぐべき (一一三五)

76 夢のみに 継ぎて見えつつ 竹島の 磯越す波の しくしく思ほゆ (一一三六)

77 静けくも 岸には波は 寄せけるか これの屋通し 聞きつつ居れば (一一三七)

78 高島の 阿渡白波は 騒けども 我は家思ふ 廬り悲しみ (一一三八)

79 大きな海の 磯本揺すり 立つ波の 寄せむと思へる 浜の清

く

(二二三九)

(6)の地名は、播磨(62・69)、紀伊か(66・68)、筑前(70・71)、近江(78)と多方面にわたっており、未詳のもの(65・73・76)や、無地名の歌も多い。しかし、西海道に属する地名はここ以降にまゝまゝ現れ(70・71・84・85・86)、それ以前に見えないことに注意すべきであろう。播磨の地名が存在することも合わせてみれば、(6)は西海道へ向かう「船旅」をイメージさせるべく配されているのではないだろうか。

瀬戸内海を行く船行での作は、既に(3)でも見た。しかし(6)は、(3)とは性質の異なる航行を描いている点が重要である。(6)で目立つのは、波が立つことをうたうもの(波線部)であり、一八首中一首に及ぶ。それ以外でも、船泊りの不安(64・69)や、潮流の速さ(74)をうたうもの(破線部)があり、(6)は全体として航海の「危険」と「不安」を強調するものといえる。他方、(3)では、過ぎてゆく水辺の景への讚美(17・19・22・27・30)や名残惜しさ(14・20・21・23)をうたうものが主であり、航行の不安をうたうものは24・29のみである(これととも、24は波の音に催された感傷をうたうもので、29の嵐もあくまで危惧にとどまる)。

(3)・(6)両群のテーマの相違を象徴的に示すのは、両群に属する類歌のあり方である。(3)に属する27と、(6)に属する74は、共に「海人とか(や)見らむ」という句を共有するが、前者が「清き荒磯を見に来し我を」と、海人と見誤られる理由を荒磯の見物として示すのに対し、後者は「潮速み磯廻に居れば」と、潮流の速さを避けることを理由としている。

このように(3)・(6)の描き出す印象は異なるものであり、ここに両群が分かれて配されたことの意味があるのだろう。すなわち、へ景物への飽かぬ思いを抱きながらの航海が(3)に具現された「羈旅」だとすると、(6)のそれは、へ危険を伴う長距離の航海」というべきものである。

(6)末尾では無事岸に辿り着いた後、波音を聞きながらの夜(76)と、一夜明けて見る浜の風光の清々しさ(79)が描かれ、上陸後の(7)陸行(山越え)での作(80・90)が続く。

80 玉櫛筥 三諸戸山を 行きしかば おもしろくして 古思ほ
ゆ (二二四〇)

81 ぬばたまの 黒髪山を 朝越えて 山下露に 濡れにけるか
も (二二四一)

82 あしひきの 山行き暮らし 宿借らば 妹立ち待ちて 宿貧
さむかも (二二四二)

83 見渡せば 近き里廻を たもとほり 今そ我が来る 領巾振
りし野に (二二四三)

84 娘らが 放りの髪を 木綿の山 雲なたなびき 家のあた
り見む (二二四四)

85 志賀の海人の 釣舟の綱 堪へかてに 心思ひて 出でて来
にけり (二二四五)

86 志賀の海人の 塩焼く煙 風を疾み 立ちは上らず 山にた
なびく (二二四六)

右の件の歌、古集の中に出づ。
87 大穴道 少御神の 作らしし 妹背の山を 見らくし良しも

88 我妹子と 見つづ偲はむ 沖つ藻の 花咲きたらば 我に告
げこそ (二二四八)

89 君がため 浮沼の池の 菱摘むと 我が染めし袖 濡れにけ
るかも (二二四九)

90 妹がため 菅の実摘みに 行きし我 山道に迷ひ この日暮
らしつ (二二五〇)

右の四首、柿本朝臣人麻呂が歌集に出づ。

80〜83は山道を行く歌である。82は山中で宿を貸してくれる女性を空想し、83は「本来は人目をさげつつ隠り妻を訪れる時の歌であろうが、その一首を、山の旅の三首の後に、旅の終りの歌として転用したものとと思われる」(『全注』)。84の「家のあたり」について、諸注は多く「作者の家は、木綿の山のあなたにある」(『全註釈』)とみなすのであるが、ここは現地で知り合った女性の住む「家」と解すこともできる。そうすると、82で女性を思つて旅をしていた男が83で女の住む里に辿り着き、84ではその「家のあたり」を眺めながら別れた、その妹への思いを抱えながら「心中、別れの辛さに堪えがたく思いながらも、あえて家を出て来てしまった」(『釈注』)歌が85であると思われる。この「思ひ」の対象を諸注は「家郷大和の妻」(同)とするが、前歌からの連想関係を重視すれば、それは西海道を思わせる山中で出逢つた女性のようである。86は前歌と初句を共有するゆえにこの位置にあるのであろうが、「離れがたい思ひの寓喩」(『全注』)もあるのだろう。87〜90は人麻呂歌集歌を一括して取めたもので、前歌との関係は88以外の三首が「山の歌」であ

ることによるのだろう。なお、89・90は、旅の歌としての性質が認められないとする向きもあるが、「濡れにけるかも」や「山路に迷ひこの日暮らしつ」という表現に、都人の日常とは異なる旅の歌としての性質を認めることができる。⁽²⁰⁾

(7)における〈羈旅〉像は、陸を行く〈移動〉を中心に描きつつ、そこでの女性との〈出会い〉と〈別れ〉に焦点を当てたものといえる。

五 おわりに —— 卷七・羈旅作の描き出すものと

その表現史的位置

前節での検討により、羈旅作九〇首が一つの〈羈旅〉の印象を描き出していたことを確認した。その方法は、具体的には次の三点によっていた。

IV 歌の地名は全体として七道順に配置されており、詠物歌群

(①)および「芳野作」以下(②)に対置的なあり方で、畿外諸国の広がりを示す

V IVを尊重しつつも、隣接・近隣歌とうしの主題・表現上の連想的関係を重視する

VI Vに加え、〈旅人の動き〉による大まかなまとまり(①)〜(7)を構成し、その内部においても〈羈旅〉における心情的展開を示す

第二節での検討により、巻七における羈旅作の位置については、既にI・II・IIIの三点を確認したが、〈羈旅〉主題の内実と関係する

ものは、I〈畿外〉に在ること、およびII〈海〉との関わりである。詠物歌群において、宴席の場等で物を詠むこととして位置づけられているのが、巻七雑歌部における「日常生活世界」なのだとなると、これらI・II・IV・VIの各要素によって、「非日常生活世界」たる〈羈旅〉を描き出すことが、羈旅作の眼目であったのだろう。これを端的に述べると、海路を主とする畿外諸国への往還の旅、特にその移動の際の心情の形象化ということになる。こういった〈羈旅〉の印象を描き出すためには、あくまで「播磨作」「紀伊作」といった特定の地での作として示すのではなく、「羈旅作」という大きな括りで標目を示すことが必要だったのである。

万葉の旅の歌に対する一般的理解として、家郷(故郷)や「家なる妹」へ向かうものと、現地へ向かうものとの、二つの傾向が指摘されることが多いが、この二傾向とは異なるものとして、高市黒人の「羈旅歌八首」(三七〇～二七七)や大伴卿兼従等の「悲傷羈旅歌」(一七三八九〇～九九)が挙げられることがある。これらについて、家・妹や現地の「いづれにも結ばれぬ〈旅〉」そのもの(漂泊感・定めなさなど)⁽²¹⁾を志向する類型とする指摘がある。

しかしそもそも、万葉の「羈旅」歌一般が、家・故郷を離れた異郷に在ることのみならず、畿外への往還等の長距離の〈移動〉と、それに伴う感慨を主題化したものと考えるべきなのではないか。黒人や兼従等の作を例外や逸脱と見るのではない、万葉の「羈旅」歌の捉え方が求められるのではないか。

A 主として都人の立場で、畿外への往還を中心とした遠距離

の「旅」に関わる傾向

B 長時間の移動にあつて「出発地と到着先のどちらにも属さない」境遇に関わる傾向

C Bに関わる長距離の移動に際し、都・夷を問わず、その出発地の親しい人々——家郷の妹も当然そこに含まれる——と離れて在ることの悲しみをうたう傾向

の三点を指摘した(旧稿では1)・(2)・(3)。今、右のCに対し、親しい人々との別れに限定せず、現地の景物との別離をも含むものと修正するならば、この三点は基本的に当該羈旅作にも適用可能なものである。右のうちBとCは、Aから派生したものといえる。すなわち、畿外への往還等の長距離の移動(II A)を歌に詠む時、そこに詠みこまれる情意は、出発・別離の時には、家郷・現地の人と景物への思い(II C)となり、移動時にはどちらにも属さないこととの感慨(II B)となるからである。羈旅作においてこれらに相当するものとして、第四節で確認したように、景物の賞翫と名残惜しい旅立ち、その後の回想といった旅の推移(1)・(5)、旅先で出会った女との関係(2)・(7)、景物への飽かぬ思いを抱きながらの航海(3)や危険を伴う長距離の航海(6)、山中を行くこと(7)などの心細さが描かれ、それが、海路を主とする畿外諸国への往還の旅に伴う感慨として示されていた。⁽²²⁾

当該羈旅作は、巻七の読者に対して、理解の前提として一首一首は多様な内容を含み持ち、様々な場で詠まれた歌であることの了解を求めつつも、畿外への往還等の長距離の移動の形象化によって、巻七雑歌部という場において一つの〈羈旅〉像を示し得ているとい

えるだろう。

なお、柿本人麻呂の「羈旅歌八首」（三二四九〜二五六）や黒人の「羈旅歌八首」、倭徒等の「悲傷羈旅」歌などはそれぞれ異なる作品でありながら、AとCのような共通する性格を持つており、これらが万葉集全体の「羈旅」の輪郭を形作っているともいえる。卷十二「羈旅発思」および「悲別」（三二二七〜三二二〇）などの他の旅の歌の部類や、作者不記の巻々における編纂や享受をめぐる問題については、今後の課題としたい。

*万葉集の引用は、基本的に『新編日本古典文学全集 万葉集』（小学館）によったが、私に改めたところがある。万葉集の注釈書の略称は、通行のものに従った。

注

- (1) 渡瀬昌忠「非略体歌と題詞の有無」(初出一九六二年七月・八月)、および「万葉集の巻々と題詞」(初出一九六六年二月)。共に『渡瀬昌忠著作集』三(おうふう、二〇〇二年)所載。
- (2) 身崎壽「万葉集卷七論序説」(『萬葉集研究』二七、二〇〇五年六月)二六一頁。
- (3) 吉川貫一「万葉集羈旅歌考——行幸・從駕の歌と卷七「羈旅作」を中心として——」(『萬葉雜記』和泉書院、一九八二年。初出一九六七年二月)一一一頁。

- (4) 高野正美「卷七行旅歌群」(『万葉集作者未詳歌の研究』笠間書院、一九八二年。初出一九七四年)八七頁。
- (5) 篠原一二「卷七論」(『万葉集講座 第六卷』春陽堂、一九三三年)二四四頁。
- (6) 梶裕史「万葉羈旅歌論」(『三田国文』九、一九八八年六月)二頁、大浦誠士「万葉羈旅歌の様式と表現」(『万葉集の様式と表現 伝達可能な造形としての「へ心」』笠間書院、二〇〇八年)一六四頁。なお城崎陽子氏は、歌材を明示する部類歌巻としての卷七において、羈旅作が地名によって部類されていることの意義は、「どこで詠うのか」という「環境」を提供するものであるとする(「羈旅」という表現と場と」『万葉集編纂構想論』笠間書院、二〇一四年、初出二〇一二年一月。二二五〜二六頁)。
- (7) 以上、高野氏注(4)前掲論文・八七頁、および関隆司「卷七羈旅作の類景歌」(『無名の万葉集』笠間書院、二〇〇五年)二九頁の指摘による。
- (8) 渡瀬昌忠「卷七・十の分類と配列」(『渡瀬昌忠著作集』五、おうふう、二〇〇三年。初出一九八五年一月)四二九〜四三二頁。
- (9) 身崎氏注(2)前掲論文・二六七頁。なお身崎氏は、④についても、「非日常性」という枠組みでとらえるべきとする。
- (10) 以下に歌番号を示す。①は、a(大和)が、一〇七〇、一〇七四、一〇八七、一〇八八、一〇九二、一〇九三、一〇九四、一〇九五、一〇九六、一〇九七、一〇九八、一〇九九、一一

〇〇、一一〇一、一一〇二、一一〇七、一一〇八、一一〇九、
 一一一一、一一一二、一一一八、一一一九、一一二三、一一
 二四、一一二五、一一二六の計二六首。b (吉野) が一一〇
 三、一一〇四、一一〇五、一一二〇の計四首。②は、b が一
 一三〇～一一三三、一一三四の計四首。c (山背・摂津・和
 泉が一二三五～一二五一、一二五三～一二六〇の計二五首。
 ③は、d (畿外) が一一六二、一一六三、一一六九、一一七
 〇、一一七一、一一七二、一一七三、一一七四、一一七六、
 一一七五、一一七七、一一七八、一一七九、一一八〇、一一
 八二、一一八三、一一九二、一一九三、一二〇九、一二二〇、
 一二〇八、一二一一、一二二二、一二二三、一二二四、一二
 一五、一二二七、一二二八、一二二九、一二三〇、一二三二、
 一一九四、一一九五、一一九九、一二〇二、一二〇七、一二
 二四、一二二六、一二二八、一二二九、一二三〇、一二三一、
 一二三八、一二四四、一二四五、一二四六、一二四七の計四
 七首。④は、a が一二五一、一二六〇、一二六四、一二六八、
 一二六九、一二七〇の計六首。d が一二五三、一二五九の計
 二首。⑤は、a が一二八二、一二八三、一二八四、一二八五、
 一二九五の計五首。c が一二七三、一二七四、一二七五、一
 二八六の計四首。d が一二七九、一二八七、一二九三の計三
 首。⑥は、a が一三二五、一三三〇、一三三三、一三三五、
 一三三七、一三四四、一三四六、一三四九、一三五三、一三
 六三、一三六六、一三七三、一三七六、一三七七、一三七九、
 一三八〇、一三八一、一三八二の計一八首。c が一三四八、

一三五四、一三六一、一三八五の計四首。d が一三〇五、一
 三二二、一三二九、一三四三、一三四五、一三五〇、一三九
 〇、一三九二、一三九三、一三九六、一三九八の計一首。
 ⑦は、a が一四〇七、一四〇八の計二首で、c が一四一七の
 みである。

なお、一首の歌に二つ以上の地名が詠まれる場合、その地
 名が近隣のもので同一国内と考えられる場合には「1」（一首
 とした。例えば、一〇八七歌には「痛足川」「巻向」「弓月が
 岳」と近隣の地名が三つ詠まれるが、これらは「大和国」（a）
 に「1」とした。また、異なる国と考えられる場合には別々に
 数えて、それぞれの国に所属させた。例えば、一〇九八歌
 は紀伊の「妹山」と大和の「二上山」を詠むが、これらは「畿
 外諸国」（d）と「大和国」（a）の二箇所にそれぞれ「1」
 とした。また、所属国が未詳の地名を詠む一七首は除いた。

(11) 伊藤博「人麻呂歌集」の配列（『萬葉集の構造と成立 上』
 塙書房、一九七四年。初出一九七一年二月）二二四頁。

(12) 渡瀬氏注（8）前掲論文・四四〇～四四二頁。

(13) 遠藤宏「卷十四の原資料（一）——「延喜式的図式」との関わり
 を中心に——」（『古代和歌の基層』笠間書院、一九九一年。
 初出一九七七年一月）二七六・二七七頁。

(14) 村瀬憲夫「卷七雑歌部羈旅歌群の配列」（『萬葉集編纂の研究』
 塙書房、二〇〇二年。初出一九八〇年八月）一七八頁。以下、
 村瀬氏の「羈旅作」の配列についての説は、これによる。

(15) 伊藤博「つなぎ」ということ」（『萬葉集の歌群と配列 上』

塙書房、一九九〇年。初出一九八四年四月)。以下、伊藤氏の「羈旅作」の配列についての説は、これによる。なお伊藤氏は、「右伴歌者古集中出」について、「古集」の範囲をC群と重ね合わせる村瀬論文とは見解を異にし、本稿のいう②(「芳野作」(「撰津作」)の地名が③「羈旅作」と相対することや、出典未詳歌の次に古集や人麻呂歌集歌が配列されるのは異例であることを根拠に、②以下を「古集」の範囲としている。

(16) 三田誠司「羈旅歌の配列——巻七「羈旅作」——」(『萬葉集の羈旅と文芸』塙書房、二〇一二年)二六四頁。

(17) 伊藤氏はこれと関わり、(5)の途中(51)から(7)までについて、「望郷の念に燃えながら辛い船旅を続けて行った一行があった」「一行は、あちこちの海上を、昼となく夜となく荒波に揺られながら不安な旅を続けた」「そして、その果てに、高波を避けて陸に旅宿し、故郷を偲び旅先の景をほめることで、無事帰郷することを待ち望んでいる」という「筋立て」を読み取っている(注(15)前掲論文・三四一頁)。

(18) 地名「真野」は一般に撰津と考えられ、第二節で述べたように「羈旅作」における地名の例外ということになる。しかし、遠江とする説もあり(『大系』、村瀬氏注(14)前掲論文)、その位置は定まっていない。

(19) 三田氏注(16)前掲論文・二六三頁。

(20) 大浦誠士「人麻呂歌集略体歌の旅の歌」(『万葉集の様式と表現 伝達可能な造形としての〈心〉』笠間書院、二〇〇八年。初出一九九七年四月)二一三―二一四頁。

(21) 野田浩子「主題としての〈旅〉」(『万葉集の叙景と自然』新典社、初出一九八二年一〇月)一九九頁。

(22) 拙稿「羈旅」歌考——大伴卿倭從等の「悲傷羈旅」歌の場合——」(『美夫君志』八六、二〇一三年三月)四九頁。

(23) 人麻呂の「羈旅歌八首」や倭從等の「悲傷羈旅」歌などがそうであるように、万葉の「羈旅」歌の多くは、陸路よりも海路の旅を描く傾向にある。その理由は別途考察が必要であるが、「羈旅」歌の傾向B(どちらにも属さない不安)が、海路上の詠により顕著であることが大きいのではないだろうか。

*本稿は、二〇一四年度上代文学会大会(五月一日、於山梨英和大学)における口頭発表を基にしたものです。席上貴重な御教示を賜りました諸先生方に心より御礼申し上げます。

(せきや ゆいち・旭川工業高等学校非常勤講師)